

コーパスに基づく名詞転換動詞 *rake* の分析

小原真子

1. はじめに

新しい語を作る語形成の過程には様々な方法がある。主な語形成の過程としては派生があり、接頭辞や接尾辞を付加して語基の意味や品詞を変えることができることが知られている。たとえば、動詞に接頭辞の *re-* を付加して *re-write* 「書き直す」のように、やり直しの意味を加えたり、名詞に接尾辞の *-ize* を付加して *union-ize* 「労働組合化する」のように動詞を作り出したりすることができる。英語には、この他に生産的な語形成の過程として、語形を変えずに品詞を変える転換がある。たとえば、*towel* は名詞であるが、下記の例に見られるように、そのまま動詞としても使われ、「タオルでふく」の意味を表す。

(1) She came out of the shower and toweled off.

彼女はシャワーから出てくるとタオルで体をふいた。

(『ジーニアス英和大辞典』)

英語ではあらゆる品詞からの転換が観察され、形容詞から名詞、名詞から形容詞、形容詞から動詞、動詞から形容詞などの転換が観察されるが、もっとも生産的に転換が見られるのは、上記のように名詞から動詞に転換したものである(長野 2018)。本稿では名詞をもとに動詞に転換したものを名詞転換動詞とし、コーパスに見られる名詞転換動詞 *rake* の用例や頻度を調査することを目的とする。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節で名詞転換動詞の性質と先行研究の分析を概観し、3節でコーパスに見られる名詞転換動詞の用法を *rake* の用例から調査する。4節では日本語に見られる名詞の動詞化と英語の名詞転換動詞との違いについて考察する。5節はまとめである。

2. 名詞転換動詞の先行研究での分析

まず、名詞転換動詞の性質と先行研究での分析を概観する。英語の名詞転換動詞は多岐に渡っており、先駆的な研究を行った Clark and Clark (1979) では 1,300 以上の例が詳細に分類されている。出発点として Clark and Clark (1979) が挙げている名詞転換動詞のグループのうち、6つを例とともに下記に示そう。

(2) A. もとの名詞が移動物

butter the bread (パンにバターを塗る)、water the roses (バラに水をやる)、dust the shelf (棚からほこりを払う)

B. もとの名詞が場所

bottle the wine (ワインを瓶詰めする)、kennel the dog (犬を犬小屋に入れる)、pocket the change (つり銭をポケットに入れる)

C. もとの名詞が動作主

referee the game (試合の審判をする)、jockey the horse (馬に騎乗する)、nurse the patient (患者の看護をする)

D. もとの名詞が動物

fox the people (人をだます)、snake through the cars (車の間を縫うように進む)、pig at the dinner-table (正餐の席でがつがつ食べる)

E. もとの名詞が結果状態

dice the potatoes (じゃがいもをさいの目に切る)、braid her hair (髪を編む)、powder the aspirin (アスピリンを粉状にする)

F. もとの名詞が道具

mop the floor (床をモップでふく)、comb her hair (髪をとかす)、bomb the village (村を爆撃する)

上に挙げたものは名詞転換動詞の一例であるが、もとの名詞と動詞になった時の意味の関連は多様で、簡単に動詞の意味を推測することはできないように思われる。道具や場所だけであれば、その道具を使った動作をする、その場所に移動させるなどの関連性を考えることができるが、そのような方法で推測できるのは一部のみである。また、Clark and Clark (1979) は出来る限りの範囲で比喩的な用例は扱わないとしているが、その線引きは難しい。たとえば、(2D)の動物をもとにした名詞転換動詞は比喩の助けなしに成立したものだと考え

にくい。

多種多様な名詞から動詞への意味拡張を Pustejovsky (1995) の提唱する特質構造 (クオリア構造) を使って体系的に捉えようとしたのが、影山 (1999)、由本・影山 (2011)、由本 (2011) の一連の研究である。特質構造とは、語の百科辞書の意味も含めて話者の語に関する知識を詳述しようとする試みである。特質構造は、下記の4つのタイプに分けて記述される (由本 2011: 53)。

- (3) a. 形式役割：物を他の物から識別する属性
- b. 構成役割：物とそれを構成する部分の関係
- c. 目的役割：物の目的と機能
- d. 主体役割：物の起源や発生の要因

例えば、book という名詞は特質構造を使うと、下記のように記述される。

- (4)
 形式役割：artifact (x) & printed matter (x)
 構成役割：bound_pages (x)
 目的役割：read (e, y, x)
 主体役割：write (e', z, x)

上の (4) の特質構造から、book は語彙情報として、形式役割として、人工物で、印刷物であること、構成役割としては、綴じられたページで構成されていること、目的役割としては誰か (y) が読むための機能があること、主体役割としては誰か別の (z) が書いたことによって生じたものであることが分かる。

この特質構造を利用した名詞転換動詞の分析を由本・影山 (2011) を例に提示しよう。まず、例として名詞 bottle の特質構造は以下ようになる (由本・影山 2011: 194)。なお、より広く使われている用語なので、役割名は由本 (2011) のものを採用した。

(5)

形式役割：人工物 (x)
 構成役割：底、筒状の胴、首、ふたの出来る開口部
 目的役割：x の中に何かを入れて保存する。
 主体役割：人間が x を制作する。

名詞転換動詞 *bottle* の意味は、この名詞の *bottle* の特質構造を基に解釈される。動詞の *bottle* は、(6) に見られるように「瓶に詰める」または比喩的に「封じ込める」という意味を表す。下記 (6) は由本・影山 (2011: 195) に挙げられているインターネットからの用例である。

- (6) a. *Water is bottled on the day of delivery! This ensures the ultimate in freshness.*
 (当社の飲料水は配達当日に瓶に入れます。これにより究極の新鮮さが保証されます。)
- b. *High blood-pressure, headaches and tension are the end result of keeping anger bottled up.* (高血圧と頭痛と精神的緊張は、胸の中に怒りを封じ込めておいた最終的な結果なのです。) (由本・影山 2011: 195 (19))

名詞転換動詞のうち、人工物であるものは、特質構造の中の目的役割の情報を動詞になった時に利用していると由本・影山 (2011)、由本 (2011) は論じている。たとえば、(2E) の *mop* であれば、「床を掃除する」ことが目的役割の記述にあるので、これを基にして動詞としては「モップで掃除をする」という意味になる。また、(2A) の *butter* であれば、「食品に風味をそえる」ことが目的役割に情報としてあり、動詞も「パンにバターで風味を付ける」という意味になる。人工物でないものの中にも目的役割の情報を利用しているものがある。たとえば、上記 (2C) のうち、もとの名詞が動作主であるものも、名詞の職業に関連する目的が目的役割に記述されていると考えれば、動詞の意味の類推は容易である。たとえば、*nurse* は「誰かを看護する」ということが目的役割にあり、動詞の意味もこれに準じて決まるものと考えられる。

以上のように、もとの名詞の目的役割、すなわちその目的や機能にあたるものから動詞の意味が引き出されている場合には、先行研究の分析の見解も一致していることが多い。一方で、(2E) のように、もとの名詞が行為の結果状

態を表している場合、また(2C)のように、もとの名詞が動物である場合には、先行研究の見解は分かれる。まず、(2E)の powder について見てみよう。由本・影山(2011)も由本(2011)も powder の特質構造の形式役割において、powder は「粉」の状態であることが記されており、そこから動詞の「粉状にする」の意味が類推されていると論じている。ただ、目的役割の場合とは異なり、形式役割には状態・属性しか記述されていないため、由本(2011)はここから一歩進んで、powder の主体役割にある「物体を砕く」ことの結果生じた「粉末であること」が動詞の意味のもとになっているとしており、由本・影山(2011)の方は「粉状」の状態になるように何らかの〈行為〉と〈変化〉を付け加えて解釈することを提案している。

もとの名詞が動物であるものから転換した(2C)の例はさらに見解が分かれている。そもそも、動物が動詞として使われている場合には、比喩が関わっていることがほとんどで、比喩の扱いに関する見解がことになっている。たとえば、由本(2011:135)は動物の特徴としての目立つ性質、たとえば pig の「がつつと餌を貪り食う」は目的役割に記されている情報だとしている。これに対して、fox の名詞の特質構造の一部を由本・影山(2011)は(7)のように提案している。

(7)

形式役割：動物

構成役割：大きな耳、釣り上った目、突き出た口、
 黄色い体毛、4本の足、長いしっぽ、
 悪賢く人をだます（と考えられている）習性

上記(7)のように由本・影山(2011)は、英語話者が常識として認識している「キツネは悪賢くひとをだます動物」という特徴を特質構造の構成役割の中に記述し、これをもとにして「だます」という動詞の意味が導きだされていると提案している。また、先行研究では論じられていないが、snake を動詞として使用した場合、蛇のくねくねと進む様子を蛇以外のものの動きにも当てはめていることになるが、これも由本・影山(2011)に従えば構成役割に分類されることになるであろう。由本(2011)の論じるように、動物の習性を目的役割に記述すれば、bottle などの人工物から動詞を転換させる際の解釈との共通性、すな

わち名詞の目的役割に記述されているものが動詞の意味解釈に利用される、という統一性は保たれるが、それらの特徴がなぜ動物の「目的・機能」であるのか、ということが逆に問われることになるであろう¹。

このように、特質構造を利用して名詞転換動詞の意味の説明、予測することを提案している分析でも、名詞によって特質構造のどの部分を利用し、どのような動詞の解釈になるのか、という点においては議論が一致していない。また、上記で見たように、特質構造の4つの役割がそれぞれの語彙の意味に応じて利用されることになっているため、動詞の意味の解釈に特質構造がどこまで役に立つのか不明である。大部分の名詞に関しては目的役割に記述されている情報から動詞の意味を推論することができるが、その他のものに関しては、個別に対応することしかできない。

また、名詞の特質役割からのみ動詞の意味を予測するのが難しいと考えられる例が存在する。たとえば、Buck (1997) が論じているように、動詞によっては後ろの名詞によって逆の動作を示すことがある。

- (8) a. to dust the cake pans ケーキ型に粉をかける
- b. to dust the shelves 棚からほこりを払う
- (9) a. to milk the tea 紅茶にミルクを入れる。
- b. to milk the cow 牛からミルクを絞る

上記に見るように、同じ名詞転換動詞が使われているが、その動作の表す意味は a は「付け加える」、b は「取り去る」であり、反対である。このうち (9a, b) の *milk* の場合には、*milk* の特質構造の中の、(9a) は目的役割、(9b) は主体役割が関連しているとして、特質構造の役割の違いとして捉える事ができるかもしれないが、(8a,b) の *dust* は全く別の物体を指しており、特質構造で同列に捉えることは難しい。これに対して、影山(1999)は *dust* の例をはじめとして、目的役割から意味が解釈されるのではなく、語用論的知識から意味が理解されるものがあるとしている。以上のように、特質構造を用いた名詞転換動詞の意味の予測には限界があり、その範囲外となるものも存在することを認識しておく必要がある。

¹ 谷脇 (1997) も動詞の意味に利用されているのは一律に目的役割、またはマイナスの目的役割だとしている。

また、もともと Clark and Clark (1979) は名詞転換動詞の比喩的な用法をなるべく排除して分析を進めるとしているが、実例を観察すると、名詞転換動詞には比喩的な用法が見られることも多い。また、4節で見るように、日本語と英語との違いの1つは名詞転換動詞の比喩的な用法の有無にあるとも言え、その用法を分析から排除することは言語記述の観点から望ましくない。

以上、2節では、名詞転換動詞の性質、その先行分析での扱いを概観した。次節では名詞転換動詞の1例として rake のコーパスにおける用例や頻度を調査したのを見てみよう。

3. コーパスに見られる rake の用例

現在では調査の目的に応じて、様々なコーパスが存在するが、今回は名詞転換動詞 rake に関して、文脈も含めて用例を検討するため、現代英語の大規模均衡コーパスの中では比較的小さい部類である British National Corpus (BNC) を使用した。BNC は 1994 年に完成した、約 1 億語のデータ量を持つ現代イギリス英語のコーパスで、書籍、新聞・雑誌、また話し言葉も一部含まれるなど現代イギリス英語の実態を表すようにデータが集められているものである。

コーパスでの用例を整理する準備として、rake の辞書での記述を確認しておこう。様々な語の多義の関係を示した辞書である『多義ネットワーク辞典』には rake の項があり、下記のようにまとめられている。

(10) rake *n.* 熊手

① (地面を搔いて落ち葉を集める) 熊手

② *v.* 地面を熊手で搔く (メトニミー)

③ *v.* 落ち葉を熊手で掻き集める (メトニミー)

④ *v.* 皮膚を指・爪で搔く (メタファー)

⑤ *v.* 銃弾・光を地面を搔くように当てる (メタファー)

⑥ *v.* 場所をあちこち探し回る (メタファー)

(『多義ネットワーク辞典』2007, 756)

まず、(10) にあるように①の中心の意味である名詞の「熊手」から、②の熊手やそれに類した道具を使って地面を搔く動作の意味へと拡張する。ここからさらに②③のように落ち葉をかき集めたりする行為を表す動詞用法に意味が

広がっていることが分かる。これらは、名詞と動作の意味が直接に関連しており、2節で論じた特質構造の目的役割の情報が利用されて動作の意味が決まっている用法である。㊦aからは掻き集める対象の「落ち葉」を「お金」に変換して、特に *rake in* という慣用句で「もうける」の意味にも使われる。この他、ことなる意味領域のものを叙述する比喩的な用法として、指や爪などを「熊手」に見立てた㊦bの用法、銃弾や光を「熊手が地面を掻くように当てる」意味である㊦cの用法が成立する。この㊦cには銃弾や光を人の視線に変換して派生的に「人の視線であちこち見る」意味も生じる。また、熊手の掻く動作は地面の全体に渡ることが一般的なので、㊦dの「あちこち探し回る」という意味でも使われる。意味の関係が体系的に捉えられているこの記述を基にデータを整理する。

ここで、上記の『多義ネットワーク辞典』で意味の拡張を説明する際に使われている比喩の一種であるメタファーとメトニミーの定義を確認しておこう。下記(11)に挙げるのは『多義ネットワーク辞典』(2007, 4)にある記述をまとめたものである。

- (11)a. メトニミー：ものとものが世界の中で隣接する（つながっている）という認識を基盤とする比喩。
 b. メタファー：ものとものが類似するという認識に基づく比喩。

メトニミーは隣接関係にあるものに使われる比喩なので、たとえば典型例として、「今晚はなべが食べたい」の「なべ」でなべの「具」まで表していること、また「夏目漱石を読んだ」と言えば「夏目漱石の作品」を読んだことになることなどが挙げられる。これに対して、メタファーは別の意味領域のものが利用される比喩であるので、たとえば「机の脚」「台風の目」といった、本来ならば「脚」や「目」がないものに対して、その形状の類似から人間の身体に関する表現を使うことなどが挙げられる。名詞転換動詞で、名詞の指示物からそれを使った動作を表す表現にと意味が拡張するのは、動作の隣接性を利用した比喩といえ、メトニミーということになるであろう。名詞転換動詞の中心的な意味にメトニミーが関わっていることは、Bauer (2018) も指摘しており、上記の『多義ネットワーク辞典』の編集方針などにも反映されている。

名詞転換動詞は様々な用法に拡張しているが、実際のコーパスの用例をいく

つか確認しよう。今回は上記の『多義ネットワーク辞典』のrakeの語義を中心に、コーパスの用例を分類した。方法としては、最初にBNCの用例のrakeの動詞形を検索し、全体で380例を抽出した。このうち、用例を文脈から確認して、動詞ではないものが12例、同音異義語である「傾斜する」の意味のrakeが11例あったので、それらを除き、残りは357例となった。この357例を下記の10区分に分類した。その際に、前後の文脈を見ても意味分類を判断することが出来なかったもの、用法があいまいなもの、抽象的に使われているものなど29例も除外したので、残りは329例となった。下記にBNCから抜粋した例文とともに区分を示す。

(12)a. 熊手を使って、土・芝生などをかく

As soon as the soil is dry enough to rake towards the end of the month,...

(月末に土を掻くことができるくらい乾いたらすぐ…)

b. 熊手を使って、干し草・枯葉を集める

In the autumn, a time-consuming task is the raking up of leaves.

(秋に時間を取る仕事は葉を集めることだ。)

c. その他、砂などをかきならす、かき出すなど

First rake out all loose mortar to a depth of about 12mm.

(初めに、やわらかいモルタルを約12mmの深さにならします。)

d. かき集める、お金をもうける

His new club was raking the money in.

(彼の新しいクラブはもうかっていた。)

e. 爪などで皮膚をひっかく、こする

She raked his face with her fingernails.

(彼女は彼の顔を爪でひっかいた。)

f. 手・指などで髪をかき上げる

He raked a hand through his black hair, ...

(彼は黒髪を手でかき上げて…)

g. 銃弾・光・風などが当たる

While machine-gun fire raked the streets around his office, ...

(機関銃が彼の会社の回りの通りを掃射している間に…)

h. 視線であちこちを見る

His eyes raked her face.

(彼は彼女の顔を見た。)

i. 探し回る

They rake through customer complaints for ideas for improving their products or service.

(彼らは製品やサービスの向上のため、顧客の苦情からアイデアを探した。)

j. 蒸し返す・あばきたてる

I have no desire to rake over the past but ...

(私は過去を蒸し返したくはありませんが…)

このうち、(12a-d) は『多義ネットワーク辞典』では①a)に分類されているものであり、メトニミーに該当する。(12)の残りの用法は『多義ネットワーク辞典』では、(12e, f) が①b)、(12g, h) が①c)、(12i, j) が①d)に対応し、メタファーに分類される。

語義の拡張を考える時に重要なことは、*rake* が動詞になった時、またメトニミーやメタファーで意味の拡張があった時に、もとの「熊手」の意味から全くかけ離れたものになるわけではないことである。たとえば、「熊手」から「熊手を使って土をかく」、「熊手を使って枯葉を集める」に意味が転じるのは2節で見たように、名詞の目的役割の情報が使われていると考えられる。メトニミーの中でも「お金などをもうける」の意味に転じているものは、「枯葉」など、かき集める対象を「お金」に変えたものであり、対象が変化したものと言えるであろう。これに対して、メタファーではもともとなる「熊手」のかくような動きの様態が残されている。たとえば、(12e, f) は指・手などを熊手に見立てて皮膚をかいたり、髪をかき上げたり、といった人間の動作に転用したものである。(12g) も熊手の動きが元になっているため、辺り一面をかくような様態が意味の一部に含まれており、たとえば機関銃で辺り一面を銃撃する際の動詞として使われる。また、(12h) のように視線の動きを描写する *rake* にしても、*one's gaze raked* のように *gaze* (凝視) と共起したり、*up and down* と共起していたりするので、ただ見るのではなく、「熊手でかくように」上から下までじろじろと見るような動作であることが多い。(12i) の「探し回る」も「熊手でかくように」くまなく全体を探す、という意味になる。最後の (12j) は「探

し回る」対象が過去にあるものであり、対象が転換したのと言えるであろう。このように、メタファーに分類された一連の用法は「熊手でかく動作のように」という動作の様態部分が背景にある表現であるといえる。

コーパスのデータを整理したものが、下記の表である。少し細かくなるが、(12) にあげた 10 個の分類で作成した表 1 を見てみよう。

表 1

メトニミー				メタファー						計
a. 土をかく	b. 落葉などをかき集める	c. かき出す	d. もうける	e. 皮膚をかく	f. 髪をかき上げる	g. 銃弾・光などを当てる	h. 視線で見る	i. 探し回る	j. 蒸し返す	
38	32	34	49	20	46	19	43	17	31	329
12%	10%	10%	15%	6%	14%	6%	13%	5%	9%	

表の下に今回分類した 329 例中、該当の用法がどのくらいの割合で使用されているかを示した。この表から、道具の「熊手」を使って土を掻いたり、かき集めたり、といった 2 節で言えば目的役割から意味が類推される用法で使われている a-c は、全体の 3 割程度である、ということが分かる。また、メタファーの用法のものは全体の 53% で、特に「髪をかき上げる」、「視線で見る」などは 1 割を超える用例が観察された。

全体を分類した場合には、メタファーの用例の方が若干多くなっているが、これらをジャンル別に見た場合に特徴はあるであろうか。本節の冒頭にも述べたが、BNC は現代イギリス英語の実態を表すように、様々なジャンルの英語が集められており、口語、小説などのフィクション、雑誌、新聞、非学術書、学術書、その他の分類がデータに付してある。その構成は、全体のデータ量がおおよそ 1 億語、そのうち 1 割に当たる 1000 万語が話し言葉である。また、書き言葉の構成としては、75% がノンフィクションの情報伝達文、25% がフィクションの文芸作品である。そして媒体の比率も決められており、60% が書籍、25% が新聞・雑誌などの定期刊行物、5~10% がパンフレットや広告などの雑多な刊行物、5~10% が個人書簡や日記などの非公刊の書き言葉、1~2% が演説や劇の台本である（石川 2012）。

動詞 rake のメトニミー、メタファーの例文が BNC のどのジャンルに見られ

るかをまとめたのが表2である。同じものをグラフにしたものが図1である。

表2

	メトニミー	メタファー	全体
口語	16	2	18
フィクション	37	143	180
雑誌	29	3	32
新聞	24	12	36
非学術書	7	4	11
学術書	1	0	1
その他	39	12	51

図1

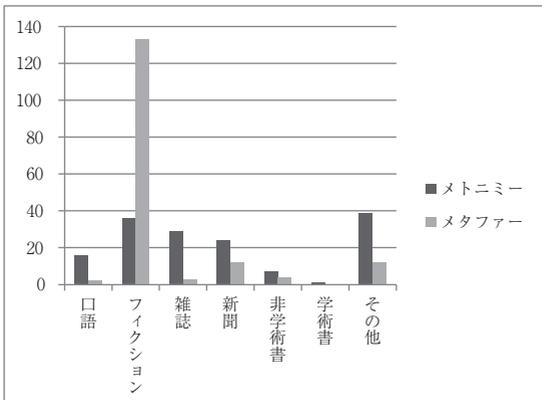


図1から分かるように、もともとの道具の用法により近いメトニミーの用法に関しては、ジャンル別の違いはほとんどない。しかし、道具から離れて人の動作や銃の動きを描写するように変化したメタファー用法は典型的に小説などのフィクションで使われ、他の媒体ではほとんど使われていないことが分かる。

さて、名詞転換動詞 *rake* はどの年代でも同じような頻度で使われているのであろうか。BNC は時系列の調査をすることは想定されていないので、アメリカ英語ではあるが、時系列コーパスの Corpus of Historical American English (COHA) を利用して頻度調査をした。COHA は 1810 年から 2000 年までの 200 年にわたるアメリカ英語のデータを集めた 4 億語のコーパスである。小説・雑誌・新聞・ノンフィクションの 4 ジャンルから 10 年ごとに同一基準でデータ収集がされている (石川 2012)。検索にあたっては、BNC のデータから、比

較的共起語が一定している「もうける」「髪をかき上げる」「視線で見る」の用法に絞って頻度を確認した。

調査方法は以下の通りである。今回「もうける」は動詞 *rake* の直後に *in* が現れているもの、すなわち *rake in* の形式になっているものを対象にした。もちろん、*rake in the ashes* (灰をかく) のように、全く違う用法のものも検索例には入ってくるが、*raked in the cash* (金をもうけた) のような用例もあるので、検索数を示すことでおよその傾向を示すことにする。「もうける」以外のメトニミーの用法に関しては、多く出現する共起語といったものがなく、用法を検索するのが困難であるため調査対象から外した。共起語が一定しているのはメタファーの用法がほとんどで、これは、共起語なしに動詞 *rake* が使われた場合、まず始めにでてくる意味としてはメトニミーの「熊手でかく、かき集める」であり、別の意味領域の事物に転用するためには目的語や主語などの位置に意味領域が変化したことを示す要素があることが必要だからであろう。

次に、メタファーの用法の「髪をかき上げる」に関しては、*rake her hair from her face* と *rake a hand through his hair* の両方の形式に対応させるため、動詞 *rake* の右側 6 語以内に *hair* が共起している形を検索した。最後に、「視線で見る」に関しては、*Her glance raked Polly from head to toe.* (彼女はポリーを頭からつま先までちらっと見た。) のように、BNC で比較的用例の多く見られる動詞 *rake* の左側 2 語以内に視線を表す名詞 *eye*, *gaze*, *glance* が現れている例が使われているものを単数形、複数形の区別をせずに検索した。なお、動詞 *rake* も単純現在形だけでなく、屈折形の *-s*, *-ing*, *-ed* 形なども含めて検索している。

まず、参考までに BNC で上記の方法で検索した時の検索数を表にまとめた。表 1 と表 3 を比較すれば分かるが、動詞 *rake* を検索したものは、*rake* の同音異義語、動詞でないものなども含むので、検索数が大きくなり、「もうける」「髪をかき上げる」「視線で見る」は例文を個々に確認した時よりも件数が少なくなるため、動詞 *rake* に対する割合は小さくなる。

表 3 BNC における割合

	検索数	動詞 <i>rake</i> に対する割合
動詞 <i>rake</i>	380	
<i>rake in</i> (もうける)	44	12%
<i>rake</i> … <i>hair</i> (髪をかき上げる)	32	8%
<i>eye/gaze/glance rake</i> (視線で見る)	35	9%

アメリカ英語の時系列コーパス COHA ではどのような頻度になるだろうか。まず、動詞 *rake* の検索数は 2231 例である。*rake in* の検索数は 246 例で表 4 に見るように、割合は BNC とそれほど変わらない。ところが、「髪をかき上げる」、「視線で見る」の割合は少ない。特に「視線で見る」の方は BNC での出現割合に対し、極端に低くなっている。この原因はアメリカ英語、イギリス英語の違いに起因するものか、コーパスの構成比率に起因するものか不明だが、今後の課題としたい。

表 4 COHA における割合

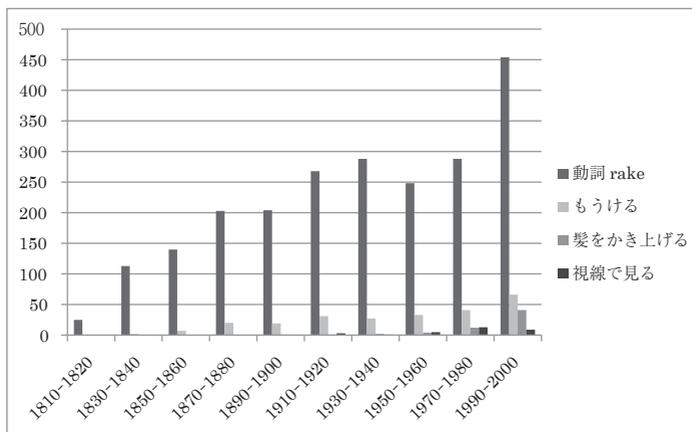
	検索数	動詞 <i>rake</i> に対する割合
動詞 <i>rake</i>	2231	
<i>rake in</i> (もうける)	246	11%
<i>rake</i> … <i>hair</i> (髪をかき上げる)	61	3%
<i>eye/gaze/glance rake</i> (視線で見る)	34	2%

さて、COHA では年代別のデータが同一基準で収集されているので、これを使って下記のような興味深い事実を見てとることができる。下記の表と、それを基に作成したグラフを見てみよう。下記の表 5 は上記の方法で出した頻度を 20 年毎に集計したものである。また、この表をもとにグラフにしたものが図 2 である。

表 5

	1810- 1820	1830- 1840	1850- 1860	1870- 1880	1890- 1900	1910- 1920	1930- 1940	1950- 1960	1970- 1980	1990- 2000
動詞 <i>rake</i>	25	113	140	203	204	268	288	248	288	454
<i>rake in</i>	0	2	7	20	19	31	27	33	41	66
<i>rake</i> … <i>hair</i>	0	0	0	0	1	1	2	4	12	41
<i>eye/gaze/ glance rake</i>	0	0	0	0	0	3	1	5	13	9

図2



上記の表・グラフから分かるように、動詞 *rake* の使用頻度は年代ごとに明らかに増加している。語彙としての *rake* 自体は、古英語の時代（900 年以前）から存在するものである（『ランダムハウス英和大辞典』）が、名詞転換動詞に限ると過去 200 年間で用例数の変化が見られるのは興味深いことである。また、それぞれの用法は各年代で現在と同じように使われているのではなく、*rake in* については 1830 年代から始まって徐々に多くなってきており、*rake ... hair*、*eye/gaze/glance rake* に関しては、コーパスのデータ上で見られるようになるのは 1900 年代以降であることがわかる。この検索結果だけでは示唆的なことしか分からないが、現在標準的に使われている名詞転換動詞 *rake* の使用がゆっくりと拡大していったこと、また用法によっては最近になって使用頻度が高くなってきたものがあることが分かる。今回調査したものの中では、メタファーの用法の方がメトニミーよりも後になって使用されるようになってきたように見えるが、たとえばメタファーの「銃などを辺り一面に当てる」の意味の用例は COHA で *the guns raked them four times in less than fifteen minutes*（銃が 15 分以内に彼らを 4 回も掃射した）のように、1830 年代から観察される。どの時代にどのような用法が多いかに関する調査は今後の課題としたい。

3 節では、まず BNC のデータから、名詞転換動詞 *rake* が単に道具を使う、という意味から拡張して様々な用法で使われていること、また比喩的な用法の使用割合がかなり高いものであること、また COHA の時系列データからは過

去 200 年に動詞としての *rake* の使用が徐々に増えてきていることなどを観察した。

4. 日本語における名詞の動詞化

最後に、4 節では日本語との違いを考えてみよう。英語には名詞転換動詞が非常に多く、また生産的である。たとえば、Bauer et al. (2013) は現代アメリカ英語の大規模コーパス *Corpus of Contemporary American English* のデータと *Oxford English Dictionary* の収録語彙とを比較し、コーパス上にしかない *bathroom*, *career* 'to have a career' など 24 の動詞が新たに名詞転換動詞として使われるようになってきているものであると論じている。これに対して、日本語ではどうか。日本語では名詞をそのままの形で動詞として使うことはできないが、名詞を動詞化する方法として、由本・影山 (2011) は以下の 2 つの方法を挙げている。

(13)a. 名詞 (の一部分) に「-r」を付けて動詞語幹を作る²。

事故 → 事故る、コピー → コピる

b. 名詞に「する」を付ける。

お茶する、スタバする、写メする (由本・影山 2011、181 (3))

このように、名詞から動詞を作る方法は日本語にもあるが、その生産性、使用範囲は英語とは大きくことなる。たとえば、(13a) の「事故る」などはすでに『デジタル大辞泉』などの国語辞典にも掲載されているが、俗語的表現である。この他にも、名詞に「-r」を付けて動詞にしたものは「ミスる、パニクる」など、俗語的表現が多い。また、この種の表現は使用域も限られ、若者言葉に多く見られる。井上 (n.d.) は平成 23 年度に大阪教育大学で調査を行い、若者言葉に見られる「名詞+r」の形をまとめているが、臨時的なものが多いと報告している。その中には、「キョドる (挙動不審になる)、ググる (Google で検索する)、コクる (異性に告白する)、デイスる (中傷する)」など、かなり認識されるようになってきているものもあるが、これらが俗語的表現であることは明らかで

² 動詞にする時に「る」でなく、「-r」を付けるとなっているのは、過去形にした時に「事故った」となるからである。「る」であれば、「事故た」という活用形になる (由本・影山 2011)。

あろう。これに対して、今回調査した rake を始めとして、英語の名詞転換動詞は一般的な語彙であり、俗語的表現や若者言葉に限られない。また、上記の日本語の「名詞 + r」の意味は名詞の指示する事物に直接関連した通常一つの動作に限られるものが多く、英語のように様々な用法、特に比喩的な用法への広がりは見られない。

この一方で、(13b) の形式で名詞から動詞を作るのは日本語ではより一般的であるが、由本・影山 (2011) が論じているように、「する」が付くことができる名詞は限られている。名詞は具体的な事物を表すモノ名詞 (鉛筆、自転車など) と事象を表すデキゴト名詞 (工事、会議など) に分けることができる (影山 2011) が、「*鉛筆する、*自転車する / 工事する、会議する」の対比から分かるように、(13b) の形で「する」を付けることができるのは、デキゴト名詞に限られる。(13b) の「お茶、スタバ」なども単純に事物を表しているのではなく、誰かとお茶を飲みながらひと時を過ごすこと、スタバで一服することなど、一種の事象を表しているので、「名詞 + する」の形をとることができるのであろう。これに対して、英語では towel、sugar など一般的な事物を指すモノ名詞を動詞に転換して使うことができるところが日本語との大きな違いである。

以上のことから、日本語での名詞を動詞化する過程について、次のようにまとめることができる。まず、「する」を付けて動詞化する方法は一般的ではあるが、もともと事象の意味が含意されているデキゴト名詞である必要がある。この他、「る」を付けて動詞を作る方法もあるが、俗語的で特殊な場合に限られる。これに対して、英語ではもともとは事象の意味を含まないモノ名詞に関連する動きの意味を新たに加えて、動詞に転換することができる点で日本語と大きな違いがある。また、転換の現象は一般的な語彙で見られ、名詞から転換して動詞になった語彙は、さらに比喩的な用法へと拡大していく点でも大きくことなる。

今回は日本語と英語の違いにはこれ以上立ち入らないが、名詞転換動詞の多様さは英語の動詞の種類の高さの一因ともなっており、日本語と英語の違いを考える上で重要な点である。

5. まとめ

本稿では、英語の名詞転換動詞に関してコーパスの用例を基に特徴を論じた。

名詞転換動詞に関しては、もとの名詞の意味と密接に関わる中心的な語義について名詞と動詞の意味の関連を論じている先行研究が多いが、今回は *rake* の基本的意味である「熊手」という道具を使って目的の動作をする、という用法だけでなく、何か別の意味領域のものを熊手のように動かして動作をするというメタファーの用法も合わせて観察した。英語では名詞転換動詞の生産性が高いと言われているが、特に、比喩的な用法にまで語義が拡張するところが特徴的であると言える。

今回は *rake* の調査だけにしぼったが、この他にも具象名詞から転換した動詞でありながら、比喩的に動作の様態を描写するように語義を拡張した動詞は多数存在する。動作を細かく描写するのに異なる動詞を使うのは英語の特徴とも言え、その実態を調査するのは日本語と英語の語彙形成の在り方を知るだけでなく、認識の違いを知ることになる。今後の課題としたい。

参考文献

- Bauer, Laurie 2018. "Conversion as metonymy," *Word Structure* 11, 175-184.
- Bauer, Laurie, Rochelle Lieber, and Ingo Plag. 2013. *The Oxford Reference Guide to English Morphology*. Oxford University Press.
- Buck, R. A. 1997. "Words that are their opposites: Noun to verb conversion in English," *WORD* 48, 1-14.
- Clark, Eve V. and Herbert H. Clark 1979. "When Nouns Surface as Verbs," *Language* 55, 767-811.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 石川 慎一郎 2012. 『ベーシックコーパス言語学』 ひつじ書房.
- 井上 博文 n.d. 「若者ことばの「体言+る」動詞」『大阪教育大学キャンパスことば (27)』 12-13. https://osaka-kyoiku.ac.jp/_file/gakusei/kikaku/gakudayori/166/campus_kotoba.pdf
(最終閲覧日：2018年9月20日)
- 影山 太郎 1999 『形態論と意味』 くろしお出版.
- 影山 太郎 2011. 「モノ名詞とテキゴト名詞」影山 太郎 (編) 『日英対照 名詞の意味と構文』 36-60. 大修館書店.
- 谷脇 康子 1997. 「名詞転換動詞に見られる比喩」『英米文学 (関西学院大学文学研究科)』 41, 59-74.
- 長野 明子 2018. 「なぜ ice は動詞としても使えるのか? - 現代英語における転換 -」 63-86. 米倉 綽・中村 芳久 編 『英語学が語るもの』 くろしお出版.

由本 陽子 2011. 『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』 開拓社.

由本 陽子・影山 太郎 2011. 「名詞が動詞に変わるとき」 影山 太郎 (編) 『日英対照 名詞の意味と構文』 178-208. 大修館書店.

辞書

『ジーニアス英和大辞典』 2001. 大修館書店

『多義ネットワーク辞典』 2007. 小学館

『デジタル大辞泉』 第二版 2012. 小学館

『ランダムハウス英和大辞典』 第2版 1994. 小学館

コーパス

British National Corpus (<http://corpus.byu.edu/bnc/>)

Corpus of Historical American English (<http://corpus.byu.edu/coha/>)